



羅針盤

2015年度 第6号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年7月7日発行

6月10日の教育実習生によるガイダンス（1・2年生対象）は、いずれも個性と意欲に溢れていた。1年生向け菅先生のキーワードは「本気」。「本気でやっている人を無視できる？できないよね」と呼びかけ、その大切さを強調した。「本気は伝染する」とも言っていた。個人の充実が団体の充実に繋がるとすれば、前号でテーマにした「大きな波」を巻き起こす方法になる。

具体的には、今なら、「本気」を視点に合唱コンクールを振り返っておこう。成否の要因を確認するのである。君たちなら、最終的には、みんな本気になれたと思う。が、涙を呑んだクラスは、「もう少し早く、みんなが本気になっていたら…」と感じているのではないか。逆に、充実したクラスには、スタート即本気モードの手応えがあったのではないか。失敗クラスは、反省するだけでなく、成功クラスの秘訣を盗み、来年度に向けてマネをすることである。現2年生は、次にクラス替えがないことが武器になる。合唱の中心メンバーが、下克上の憂き目にあわないため、今から策を練っていく。1年生だって、中心になる才能は、早めに覚悟して、曲目を検討したり、新クラス発表と同時にダッシュを決める手はずを整えておく。

ファースト・ペンギンでいこうっ！

少しでも早くエンジンをかけて充実した時間を過ごすことが成功につながる。そういうものである。行事も、部活も、勉強も。大きな波は、そういうところに巻き起こる。

グループが一丸になって行事や試合に取り組めば、自分のことだけを考えるわけにいかなくなる。苦楽をともにした仲間、個人的な成功も収めてほしいと思う。そういう仲間にも心置きなく専念できる。実力も発揮しやすくなる。足を引っ張り合うのではなく、手を引っ張り合う関係になる。「与えることによってのみ与えられる」という連鎖がはじまるのである。

同じことが、記念祭についてもいえる。

記念祭までの過程の中でする経験をしっかりと覚えておこう。はじめは怖じ気づく人もいるだろう。情熱温度の違う者同士が、意見をすり合わせ、一つになり、共通する目標のために走り始める。主張したり、耳を傾けたり、協力しあったりして、個人や集団の力を最大限に発揮しようと工夫する。時には、消極的な態度や悲観的な意見が立ちはだかる。乗り越えられたり乗り越えられなかったり。合唱コンの経験も生かせるが、クラスごとに中味も方法も違うから、もっと複雑だ。英語や数学も大切だけど、そういう中で培われる力こそ、社会に出たときや人生の危機に直面したとき、君の拠り所になる。どうしてあんな力を出せたのか。どうして団結できたのか。なぜ失敗したのか。失敗クラスと成功クラスとは、どこがどう違っていったのか。どんなとき、どんなグループが、個人や集団から、持っている力を最大限に引き出したのか。その顛末を記憶しておく。それを経験知として、次の挑戦に生かすのである。そんなふうには経験と経験が有機的に繋がっていかなければ、行事や部活に明け暮れる意味がない。たんなる思い出作りになってしまう。

記念祭では、自己満足という観点からも、賞レースという観点からも、最終的に成功に導くのは**そのクラスの動員力**である。どんなに優れた企画も、閑古鳥ではお話にならない。お客さんに入ってもらうためにはどうすればいいか。記念祭に定評や固定客はない。あてになるのは、口コミだけである。口コミの発生源は最初のお客さんである。初日の午前、お客さんを集め、満足していただくことである。鍵は、家族親戚、他校の友だち。が、クラス代表がHRで呼びかけたって、動くものではない。効果があるのは、前日までに、クラスの一人ひとりが、「ここまで来たら、興行的にも成功したい。お客さんに来てもらいたい」と切実に思うことである。自分から、家族や友だちに頼むことになる。そのためには、クラスの各人が当事者意識を持ち、手応えを感じることである。少しでも早く本気になること、少しでも早く一つになることである。

最初のハードルは「みんながやるなら」という考えだ。それでは何も進まない。「みんながやるなら」という考えは、論理的には「みんながやらないから、私もやらない」と同じ。やらないときの言い訳にしかならない。そして誰もいなくなる。

逆に、成功した経験に共通するのは、1人でも「私はやる」と決意する人がいることだ。そうではないか。英語圏に「最初のペンギン (first penguin)」ということばがある。餌の魚をとるため、氷上から最初に飛び込むペンギンだ。海には魚もいるけど天敵もいる。彼が無事なら、ほかのペンギンも安心して飛び込む。勘違いでも早とちりでも、とにかく最初に飛び込む人が必要だ。

もう一つ、思い出す映画のタイトルがある。「ラストマン・スタンディング」…黒澤明の映画「用心棒」のハリウッド・リメイクだ。主人公は、町にはびこる2大マフィアを対決させ、最後に1人生き残る。平和が戻る。必要なのは、仲間が怖じ気づき、裏切ったあとでも立ち続ける覚悟だ。人間は弱いけれど、冷たいわけじゃない。誰か1人が、その決意を固めれば、1人、2人…「あいつがやるなら」と感じる人が現れる。「みんながやるなら」も駆けつける。失敗のパターンは千差万別だけれど、成功はいつも同じパターンだ。

「みんながやるなら」という考えにも、一理ある。君はヌーを知っているか。アフリカに棲む牛の一種だ。乾期になると、餌を求め、大群を作って移動する。NHKの動物番組によると、そのメリットは二つ。どちらも、渡河のときである。ヌーの旅は、雨期を迎え、濁流と化した河を渡ることになる。

ひとつめは、天敵対策。ワニが獲物を狙っている。シマウマは、数頭が間隔を空けて渡るので餌食になりやすいが、ヌーの場合は、大群が間隔を詰めて渡るため狙いを絞りにくく、捕食される確率が低くなる。

ふたつめは、対岸の地形。上がりやすい岸辺ばかりとは限らない。1メートル程度の崖でも、巨体のヌーはすぐに昇れない。しくじれば、濁流に吞まれる。ところが、大群で押し寄せると、誰かが登りやすい場所に辿り着く。それを見て、ほかの個体もそこに集中する。岸が崩れ、さらに上がりやすくなる。殺到する。崩れる。道が出る。

ヌーにもファースト・ペンギンがいる。最初に河に入る個体である。番組では、年長の牝に背中を押され、落とされるように飛び込む若い牡が映っていた。それを合図に大群が殺到する。

脳科学の茂木健一郎が、錦織圭の活躍の価値に言及して「科学の世界でも…ひとりが何かやると『あ、できる』と思える。陸上でいうと100秒、アジアの選手は10秒の壁を切れないということになっている。誰かが切った瞬間にみんな切りはじめる。人間ってそれぐらい固定観念にとらわれていて、脳のリミッターを外すのがいちばん難しい」と説明していた（「SWITCHインタビュー達人達（松岡修造×茂木健一郎）」NHK-Eテレ、6月13日）。

1人のブレークスルーが、みんなの可能性へと拡大再生産される。

せつちかでもおつちよこちよいでもいい、ファースト・ペンギンの勇気がみんなに伝染する。求められるのは、才能でも知力でもない。誰かひとりが、固定観念のリミッターをはずし、「私はやる」と決めることだ。それはほかの誰でもない、君だ。孤立を恐れない覚悟を決めたとき、その人は、決して孤独にはならない。昔先生のいうとおり、勇気や本気は伝染するからだ。まわりに、勇気や本気をもった仲間が生まれる。

これが「大きな波」を作るための成功パターンだ。行事や部活、いろいろな場所でそういう成功経験を積んでほしい。そして、その経験を勉強にも生かしてほしい。それができたら、とんでもないことになるぞ。

ファースト・ペンギンでいこう！ そこには、ほんとうの友だちが待っている。

入試のシステム変更について

今年も、入学者選抜の方法に大きな変更のある大学があります。特に3年生は、自分の志望大学がどうなっているか、目を光らせてください。

たとえば、東京農工大学と電気通信大学は、個別試験の理科が2科目必要になります。東京海洋大学は、海洋科学部の出願要件として、外部英語試験のスコア提出（英検準2級など）が求められることになりました（2年間経過措置あり）。千葉大・立教・青学などでも、学部によって同様の変更があります。

●夏休み中、進路指導室の赤本貸し出しは臨時延長、1週間までになります。